

思いだすこと・考えること

中村妙子

「子ども時代の読書の思い出、現在の翻訳の仕事の苦労話やエピソード」というご依頼である。とりとめもなく綴ることになるが、どうか、お許しいただきたいと思う。

わたしが最初に出会った本、それはヘビーター・パンの絵本だった。知っている本屋さんに母と寄ったときにいただいたもの。絵も、文も、さっぱり覚えていないが、横に長い黒い表紙だったような気がする。ティンカー・ベル、ティンカー・ベルと囁っていた記憶があるから、母がTの発音を教えこんでくれたのかもしれない——母は忙しい人で、英語を教わった記憶は以後まったくないのだけれど。

とにかくわたしは学齢前の一時期、明けても暮れてもヘビーター・パンだったようだ。

先ごろ、こんな話を聞いた。赤ちゃんを抱いたお父さんと小さなお姉ちゃんが向い合せにソファに坐って、ふざけてクッションを投げあっていた。クッションが空を切るたびに赤ちゃんはうれしがってキャッキャッとお父さんの膝で跳びはねていたが、そのうちにクッションと自分がいっしょになってしまったらしく、いきなり前へピョンと跳びだし、びっくりしたお父さんが押える間もなく、床に落ちてワーンと泣いた。

その話を聞いて思わず笑いながら、わたしはヘビーター・パンのことを思っていた。あのころ、わたしは四つか、五つか、でもビーターやウェンディーは、空を飛べても、自分は飛べないというをはっきり知っていたと思う。自分が飛べないからこそ、あの物語に夢中になったのだろうか。

カタカナを覚え、さらにひらがなが読めるようになる
と、わたしの世界はぐーんと広がった。当時は子どもの本はいまほど豊富でなかったし、そうそう買ってもらえなかったから、題名で歯の立ちそうなものを見当をつけては父の書棚から引っぱりだした。あるとき、横書きのカタカナでヘットレフパンという本を見つけた。面白そうだと手に取ったが、開いてみるとわけのわからない文言を連ねた雑誌風のもの。後でわかったのだが、これは英語風にカタカナを左から書いた題を、わたしが日本風に右から読んでいたのである。つまり小冊子の合本だったのだ。

わたしの愛読書はおいしいもの出てくる話。それも山海の珍味などでなく、ごく普通の食べものをことこまかに描写した本がこたえられなかった。たとえば「家なき子」。

小学校にはいったころ、まず小学生全集で読んで、物語そのものもさることながら、幼い主人公のために、養母が乏しい家計をやりくりしてパン・ケーキを焼いてくれるくだりに魅せられた。ジュースと鍋の上でバターが溶け、パン・ケーキの上かわがきつね色になったところを見計らって鍋の縁をほんとはんと叩くと、空中に舞いあがり、焼けた方を上にして落ちてくる。と、香ばしい匂いが台所にみなぎり……「ああ、おもしろいだ」と繰り返し読んだ。

小学校の三、四年ごろ、新しい読書の世界が開けた。世界大衆文学全集という海老茶色のクロス張りの装丁に絵入りの紙カバーをかけた小型の本が家の書棚に並びだしたのである。総ルビつきだから、小学校の低学年でも十分読める。まず、小学生全集でお馴染みの本から取りついた。菊池幽芳訳の「家なき子」もその一つであった。

子どもというものは最初の出会いでイメージを作りあげるから、往々にして依怙ひいきをする。小学生全集の「家なき子」はかいつまんだごく簡略なものだったと思うのに、わたしにはたいそうなつかしく、ずっとくわしくはあるが、主人公からして民という日本名前にした大衆文学全集の「家なき子」にあまり親しめなかった。第一、あのお

気に入りのパン・ケーキが、ここでは銅鑼焼となっていた。小学生時代のわたしは餡粉が苦手で、銅鑼焼も中の餡をすっかり取ってから食べるというふうだったから、それこそげんなり、たいへんな幻滅を感じた。ルバーブ・タルト、いちごタルトという、魅力的な音の、何やらおいしそうなお菓字も蒸餅となっていた！

しかし世界大衆文学全集そのものは、小さなわたしにとつていわば宝庫であった。読みやすいし、どれもはなはだ波瀾に富んでいた。わたしはよく扁桃腺を腫らす子だった。熱がさがりはじめると、「本なんて読まずに寝ていないと早く治らない」と叱る母が近くにいないのを確かめた上で、丈の高い本棚に足を掛けてのぼり、三冊ぐらいを取っては敷布団の下に押しこんでつきつぎに読んだ。ものによつてはかなりの抄訳で、「読みやすく、面白く」という編集方針だったのではないだろうか、訳者も小説家が多いようだった。いま思うと、あの小さな全集を読んでいたころはわたしの劇画時代だったのだろう。きりなく思い出せる題名のいくつかを拾ってみよう。同じく「言葉の劇画」を楽しまれた読者もいらっしやるかもしれないから。

まず探偵もの、冒険ものはルパンの（813）、ホーム

ズの（四人の署名）、（黒星）、（ヘルコック探偵）、（ソーンダイク博士）、（海底二万マイル）、（紅はこべ）、（宝島）。

ロマンスは（樁姫）、（クオヴァデイス）、（マノン・レスコオ）、（スカラムッシュ）、（ゼンダ城の虜）、（ジェイン・エア）。

怪奇ものは（聊斎志異）、（ボオ傑作集）。

児童ものは（小公子・小公女）、ラムの（沙翁傑作集）、ああ、きりがいい……。

ズーデルマンの（フ라우・ゾルゲ）、誰の作か、（善良な男）という話は、（テス）などよりも、大人の世界の怖さを感じさせた。

わたしは世に翻案ものというジャンルがあることを知らなかったから、少年倶楽部に（少年連盟島）という題で（十五少年）が載っていたり、少女倶楽部に（緑の天使）という題で（オリヴァー・トゥイスト）が連載されたりすると、どうして翻訳と断らないのだろうかという憤慨したものだ。

新しい言葉にぶつかったときの記憶も鮮明だ。意味を訳きただす暇はもとより、辞書など見る気もなく、およその見当をつけて先へ先へと読んでいくのだから、はてなと思

って 前後の文章といっしょに胸に疊んでおく。たとえは
「ざつくばらん」は武林無想庵訳の〈巴里の秘密〉の中で、
「凶星」は金田鬼一訳の岩波文庫の〈グリム童話集〉で、
アラバスターとか、薔薇水セウヰといった異国的な言葉は〈千夜
一夜〉で、と一々、はつきり覚えていた。

北欧の雰囲気らしいものにふれたのは菊池寛訳のケイン
の〈放蕩息子〉がビョルンソンの〈シンネーヴェン〉などよ
り早く、ユーモアをそれと意識したのは佐々木邦訳の〈ト
ム・ソーヤー〉においてであった。わたしはいつも訳者の
名前を原作者と並べて頭にいられた。

翻訳の言葉そのものを意識したのは坪内逍遙訳によつて
である。というところだが、これはレコードのおかげ
なのだ。あるとき、逍遙が自分の訳を自分で朗読している
一組のレコードを、父が買ってきた。紺の布を貼ったと、
うにはいったへハムレット第三幕第一場と、へヴェニス
の商人の法廷の場。家族のほかのみんなが飽きたころでも
面白がって何度もかけたから、いまでも大部分、暗記して
いる。一度くらべたが、逍遙全集のせりふとは少々違うよ
うだった。

わたしは〈沙翁傑作集〉を読んだあと、シエクスピアの
作品のくわしい筋を知りたいばかりに、逍遙全集を読ん
ではいたけれど、「ひどく」を「いっち」といったりする
逍遙の文はとでも取りつきにくいものに思われたらしい。
それがレコードを聞いて、なるほど、こういうふうに読む
のかと子ども心に思った。

へハムレットは「世にある。世にあらぬ。それが疑問
じゃ」の独白で始まり、オフィリアが出てくるとまった
く歌舞伎調になる（もちろん当時のわたしはそんなことは
知るよしもなかったが）。「ご前さま、このじゅうはいか
が、わたらせられます」とあれこれ話しかけるが、けっ
きよくハムレットは「尼寺へ行きや。尼になりや。さらば
じゃ！」と血を吐くような声を残して、（たぶん花道を）
去って行く。と、残されたオフィリアの愁嘆場。「なま
なか天の楽のような、ご誓言の蜜を吸うたばかりに、世の
中の女子じゅうでいっち、味気ない身となったわ……」よよ
と泣きくずれるのである。

へヴェニスの商人の法廷の場の方では「ああ、賢明なる
裁判官さま、ダニエルさま、ダニエルさまの再来じゃ！」
と強欲そうな声を張りあげての熱演。牧師の子として、獅

子の檻にいれられたダニエルは知っていても、旧約外典までは知らなかったわたしは、ソロモンならわかるけど、ダニエルがどうして裁判官なのかしらと考えながら聞いていた。

読むものがなくなると何かの文庫にはいつていた黒岩涙香のものを買ってきたが、ここでも登場人物の名はすっかり日本名前。しかし〈家なき子〉の場合と違って、初対面だから、筋の面白さにひかれてとくに違和感も感じなかった。世界大衆文学全集にはいつていた〈巖窟王〉(モンテ・クリスト伯)も涙香訳だったのかもしれない。エドモン・ダンテスは団友太郎、ダンクラーレルは段倉、ヴィルフォールは蛭峰と、悪人は悪人のような音と字になっているのも愉快だった。

そのたぐいの本で私の目にふれた最後のものは、女学校にはいつてから数冊買ってもらったディケンズ物語全集。松本泰・松本泰子訳でオリヴァー・トゥイストが織部捨造、マーティン・チャズルウィットが千鶴井長寿丸となっていた。

戦後、やたらとカタカナの多い文章が目立つようになって

たことを考えると、当時は外国は総じてまだ遠かったのであろう。

さて翻訳の仕事をするようになって、幼いころから慣れ親しんできた翻訳ものの影響が少なからず残っていることを感じる。わたしは自分の文を読みかえすとき、心の中で声を出して読む。自分の文というものは体臭とか、癖のようにならに身につけているのか、悪文でも、目には、通りがいい。声に出して読むことで欠点に気づくのは、いささかでも客観的に読めるからかもしれない。もしかしたらそれは、目で見える文章、耳で聞く文章というものの違いに違遙のレコードで気がついたからだろうか。

読者が子どもでも、あだやおろそかに考えてはいけないということも、自分の経験から銘記している。小さいころ、読んで「おかしいな」と思った文のほんとうの意味に、大人になってから、「ああ、そうだったのか」と気づくことがままあったからだ。

〈あしながおじさん〉は世界大衆文学全集では〈蚊とんぼスミス〉となっていたが、その中のジェルーシャの言葉に「孤児院育ちのあたしは〈娘大学〉を知らないけれど、

ほかの友だちはみんな読んでいるらしいのでさっそく買いました。だからいまではみんながお漬物の話をしていてもすぐわかるのよ」といった文章があった。「娘大学」——は、何のことだろうとふしぎに思ったが、ずっと後になって、娘大学とはヘリトル・ウィメンのこと、お漬物とはエイミーが教室でライムの砂糖漬を回して先生に罰せられるくだりのことだったのだと悟った。

また、小学校にはいつから読んだ小学生全集だったか、金の星社のものだったかのピーター・パンの中に、「春のお洗濯」という言葉が出てきて、「妖精の国では洗濯は春にならないとしないのかしら」という疑問をもったが、これは春の大掃除のことであった。翻訳上の間違いを「記憶にございません」といえないのはこの商売の辛いところである。証拠はいつも歴然としているのだから。間違えたときには（人間、誰でも過ちは犯すものです）せめても重版までには直したいし、間違いでなくても、疑問点にはつきりさせておきたい。こうしたアフタケアの作業の一例をこの〈幼児の教育〉を引合いに述べさせていた。場所ふさぎの一文を結ぼうと思う。

わたしが数年前に、新潮社から出した訳書に、カニング

著の〈ヘスマイラー少年の旅〉という三部作がある。それがこの秋、借成社文庫に納められることになり、漢字を減らしたり、ルビをつけたりする作業を借成社の編集の方がして下さった。それで訳書を久しぶりに取りだして通読していたおりから、〈幼児の教育〉一〇号を読んで、ヘルソーの夢で海老沢先生のふれていらっしやっした童謡の一つに、はっとしたのである。

リチャード・チェイスの編集した〈昔の歌と歌唱遊戯〉におさめられているという。「ロディーおばさんに言つてで」——は〈ヘスマイラー少年の旅〉の第一巻〈ヘクターの草原〉の末尾近くに出てくる歌である。わたしはその一節を左のように訳している。

ロディーおばさんにいっとくれ

灰色雁は死んだとね

ロディーおばさんにいっとくれ。

羽根の蒲団を作ろうと

手塩にかけて育てたが

灰色雁は死んだとき……

二節目の *saving* はとっておくという意味だが、口調上こうした。ところで問題は *Gray Goose* である。わたしもこころをはじめ灰色鵞鳥と訳した。文脈からいって、正しいと思ったからだ。ところが第二巻目の原書が届いて読んでみると *Gray Goose* はここではまったくの野鳥、しかも渡り鳥らしい。しかも二巻の題名そのものが *The Flight of the Gray Goose* なのだ。とするとあの歌はおそらく第二部の導入の意味もあつて挿入されたのか……というわけで校正の段階で第二部に揃えて「一巻目も『灰色雁』とした。ただどうも釈然としない思いが残った。

ヘルソーの夢を拝読して、このことはやっぱり確かめておく必要があると考え、日本野鳥の会に所属する知人に電話で訊いた。その結果、次のことがわかったのである。

日本の家禽のいわゆる鵞鳥はサカツラガンという種類が長い間に飼ひ慣らされたものであるが、欧米の家禽の *goose* は主としてハイロガンが家禽化したものである。

つまり日本ではガンとガチョウと二通りにいい分けるものが、欧米ではともに *goose*、しかも *gray goose* なのだ。したがって第一巻目は日本語でいえば鵞鳥なのだろうけれど、第二巻目との関連を考えれば灰色雁とせざるを得ない。

い。しかし鵞鳥でないとか歌そのものはやはり落ちつきがある。

とまあ、アフタケアの機会を与えて下さったことについて、海老沢先生に感謝申しあげるとともに、ままならぬ日本語をかこった次第である。

翻訳をやっていてふしぎに感じるのは、印刷になってしまつてからでも、題材に関連のあること、訳語に関するところが本、新聞、雑誌、テレビなどで、ちょいちょい目にふれ、耳に達することである。幾度、わたしは誤訳をそうしたありがたいチャンスによって土壇場で訂正することができたか知れない。自分に不得手な分野を承知している、また怪しかった訳語について目を光らせ、耳を澄ましてみると、多くの場合、しばらくたってから「なるほど、ここはこういう意味か」と納得することが多い。

たかが子どもものの翻訳と馬鹿にすることなかれ。子どもものの翻訳はむずかしい。多くのことが前提としていわず語らず、理解されているだけ、それだけむずかしいのである。

(翻訳家)